

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：64302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580049

研究課題名(和文) 超越的文化バイアス論としての古典文学研究の可能性

研究課題名(英文) Exploring the Potential of Japanese Classics Studies: As a Theory of Transcultural Bias-ology

研究代表者

荒木 浩 (ARAKI, Hiroshi)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：60193075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本古典文学のオリジナルな分析に立脚したユニークな視点の研究によって浮かび上がる日本文化の内なる国際性と日本独自のバイアスの考察を試み、その成果によって、従来の日本文学・文化研究の構造に大きなパラダイムチェンジを引き起こすトリガーとなる狙いを込めて推進した。月の顔の形象をめぐる日本的性格とその近代化・西洋化の関係、「言語のプライバシー」という視点、『源氏物語』に潜在するインド性や国際性の問題などを起点とする様々な問題を深めつつ、新しい挑戦的萌芽研究「国際的日本研究における古典文学研究の基層と戦略」(JSPS科研費JP16K13198)へと接続した。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to explore the potential of Japanese culture and its original transcultural characters in classical literature. For that purpose, I excavated and analyzed the inner or virtual globalism in Japanese classics from diverse unique viewpoints, and tried to elucidate the peculiar "bias" in Japanese culture and its original reception histories of foreign cultures diachronically and find out some new images and potential presence in premodern Japanese literature. In that research process, I challenged to raise some great paradigm changes in the traditional methodology of Japanese literature and culture studies. To do so, I took up various topics in the projects, such as the face of the moon, the privacy of language, India-ness in the Tale of Genji, and so on. Finally, this project developed to connect with new JSPS Grant-in-Aid for Challenging Exploratory Research (JP16K13198) "Basics and Strategies for International Japanese Studies Research in Classical Literature."

研究分野：日本文学

 キーワード：月の顔 言語のプライバシー 『源氏物語』のインド性 世界文学観の歴史的考察 夢と文化表象 禅
 文化の近代的屈折 古典研究の国際的戦略

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、インド・中国・日本という三国の仏法伝来史を骨格とする12世紀成立の『今昔物語集』を中心的な研究対象として、日本人の対外観とその作品生成の関係を分析してきた。一方、所属先の国際日本文化研究センターでは、さまざまな国のそれぞれ独自の研究背景や学際的ディシプリンを有する研究者と出会う。そうした多様な意味での国際的な視界での研究経験は、研究代表者が専門とする伝統的な古典文学研究の方法に、多くの反省と転換をもたらすことになった。本研究では、如上の研究文脈から見出される、いくつかの研究の萌芽を集約することで、古典文学研究の持つ可能性と方法論的な示唆を提示しようとするに至った。

関連する問題は多岐にわたるので一例のみを挙げてその方法論を説明しよう。ヨーロッパでは、古代より、神人同型論 (anthropomorphism) という思想のもと、月や太陽は人間と同じ形をしており、それ故人間と同様に顔・鼻・口を持つものとして理解され、画像的に形象された。ところが日本の月は、明治以前には、目・鼻・口などを有する顔として描かれることは原則としてなかった。『竹取物語』以来、日本では「月の顔」という表現を有しており、また日本でも神仏や動物、さらには器物の擬人化 (もしくは霊物化) は広く認められる文化現象であるにもかかわらず、である。こうした現象の国際的なズレについては、これまでは注目されることがなかった。

視野を広くインド・中国に広げてみると、仏教文化や東洋思想のコンテクストでは、月は神であった。たとえば神話的背景を持つウサギが住む場として形象されることなどはあっても、満月や三日月そのものを「顔」としては形象しない。現代のASEAN諸国の研究者や学生に話を聞いてみても、伝統として、月に顔を描いたりしないようである。

ところが日本では、近代になると状況が一変する。宮澤賢治 (1896~1933) は、自ら目鼻口を持つ月の顔の絵を描き、その作品世界には、月の顔、煙を吐く月、香りをはき出す月を叙述する。そこにはむしろ明治以降の西洋文化の移入と影響があるが、宮澤賢治の場合はそれに留まらず、当時、劃期的な宣伝戦略を展開した、花王石鹸の広告に描かれ月の形象がある。同時にまた宮澤賢治の発想の背景には、彼が深く影響を受けた島地大等の『漢和対照妙法蓮華経』に付載された、「法華歌集」の世界が存し、それらが複雑かつ習合的に投影されているとおぼしい (拙稿「釈教歌と石鹸 宮澤賢治の 有明 再読」 (『宮澤賢治の深層 宗教からの照射』法蔵館、2012年)。さらにまたその背後には、日本文化における擬人化のあり方という普遍的問題や、映画『月世界旅行』などに描かれる、SF的な月と科学、さらには童話の

受容との融合などの観点も潜んでいる。

古典文学に起因してこのように広がる問題群が、海外文化の受容の中で無意識に発するバイアスの問題として、日本文化のさまざまな場面に潜在する。本研究の始発には、こうした個別の事象とその文化的脈絡への着眼があり、それは、従来の古典文学・文化研究への再解釈と、さらには新たな研究基盤の確立へのトリガーにもなるという新しい研究視点の発見がある。これら問題群の創造性内在へ関心が、本研究の起点になっている。

2. 研究の目的

本研究の「超越的文化バイアス論」とは、歴史的時空に立脚した古代以来の国際関係史的・対外交流史的な常識を前提としつつもそれにとらわれず、むしろ古典文学分析に立脚したユニークな独創的研究によって浮かび上がる、日本文化の内なる国際性、またそれに付随する日本独自の文化受容と創造のバイアスを考察することである。テーマとする問題の性格から、また研究シーズの発掘という視点から、議論の対象を限定せず、多様な観点で捉え、さまざまなテーマの展開に即して分析を進める。たとえば中世のインド憧憬に潜む日本独自の「言語のプライベート」の問題や、近代化の中に潜在する月の顔の形象のような西洋文化の摂取と近代広告の相克の問題など、幅広く設問を捉えつつ相対化し、常識的な比較研究や出典論の桎梏を超えた、日本古典文学研究の新しい可能性を問いたいと考えたのである。

こうした時空を超えるインターディシプリナリーな学際的問題は、研究代表者の研究履歴の中でいくつか内在しており、それは畢竟、古典研究の可能性として収斂する。本研究では、研究代表者の研究コンテクストですでに試論を示している下記の諸点を始発とした。

(1) 月の顔の形象化をめぐる問題

(2) 言語のプライベート (ベネディクト・アンダーソン『幻想の共同体』にヒントを得た私の用語) という概念をめぐる問題

(3) 『源氏物語』のような「国風文化」的作品に潜むインド表象

これらを起点に問題群を相関させ、国際的・学際的なコンテクストや場で発表や議論を重ねることで、本研究の根幹として、日本古典文学研究の可能性を追求することを最も重要な目的とする。そして分野やジャンルごとに細かく分化して、高い専門性の潜在を分野横断的にうまくアウトプットしえない日本古典文学研究の一面を、ユニークかつグローバルなパースペクティブ・視座で捉え発信することで、日本古典文学研究の新しい進展に大きく寄与することを志向する。

3. 研究の方法

本研究は、「研究開始当初の背景」で例示し論じたような方法論と視点のもとに始発

し、「研究目的」で述べたように研究代表者がこれまで萌芽的に形成してきた3つの試論(1)月の顔の形象化をめぐる問題、(2)言語のプライバシーという概念をめぐる問題、(3)『源氏物語』のような「国風文化」的作品に潜むインド表象という、学際的な問題群の分析を始発に、それぞれの研究シーズについて、既発表の論文を分析・再構築し、文献的追跡を深め、関連する研究史を整理し、文化の網を拡げて新しい研究成果を展開・蓄積する。そうして日本古典文学研究における「超越的文化バイアス論」という統合的理解の構築を目指した。さらに如上の成果を国際的な学際研究の場に還元して、海外の研究者や学際的な研究視点から批判的な対論や議論を得、より広い研究のコンテクストを模索して、古典文学に潜む「超越的文化バイアス」を実証的に提示しようと試みた。

4. 研究成果

(1) 26年度は、研究のキックオフと展望のため、下記のような研究を行った。

月の顔をめぐると日本の性格・近代化、西洋化の関係をめぐるとの問題については、インドで出版された学術誌にこれまでの研究成果を整理して考察し、宮澤賢治論の新展開として論文化した。

「言語のプライバシー」という問題については、『今昔物語集』生成と対外観、またその周辺をめぐって、中国宋代との文化接触をめぐって検討を進め、関連論文を執筆した。

拙著『かくして『源氏物語』が誕生する』(2014年)で先鞭をつけた『源氏物語』に潜在するインド性や国際性の話題を考察して、スイスのチューリヒ大学の教員・大学院生との研究交流会において発表し、比較文学・比較文化史の視点のもとに対話を進めた。

新たな研究展開として、戦後に一時的に展開したドイツ流(ゲーテなど)の「世界文学」観が及ぼした文学史と戦後文化観の影響とそのバイアスを考察し、韓国日本語学会において発表した。

古典文学における夢の表象をめぐるとバイアスの研究については、韓国放送大学、ベトナム国会大学ホーチミン市校において、それぞれ講演のかたちで研究成果を公表した。また、国際日本文化研究センターにおいて、国際研究集会を主宰した際、その成果を発表した。

本研究成果の先取りの視点として、バイアス論から展望できる古典研究の国際的戦略について、韓国の聯合学会で研究発表を行った。

(2) 27年度は、前年度までに蓄積した諸問題の整理と統合、そして活字化等の基盤を確立することを進めた。また、その延長線上に開発した新たなテーマ(26年度と関わる)として「古典文学研究の可能性」を追究した。計画に沿って、下記の研究を遂行し展開した。

「言語のプライバシー」について構想を深め、10世紀以降の日本の対外観と仏教文化の問題にこの概念を応用して分析した。その対象は、『日本往生極楽記』、『往生要集』、『今昔物語集』などと当代の宋との関係・意識に関するものである。その成果を国内外の学会講演やシンポジウム等で公表した。

戦後の「世界文学」観については、国際日本文化研究センターの研究会で「文学史からかえりみた英雄時代論」という研究発表を行ったほか、研究の整理を行い、28年度開催の学会シンポジウムでのパネリスト発表において、中世文学研究の視点から問題を展開して発表すべく準備を進めた。

古典研究の国際的戦略については、国際日本文化研究センターの事業や海外招へいの業務などを併せて、中国、ブルガリア、イタリア、アメリカにおいて関連テーマの発表や研究交流を推進した。とりわけブルガリアでは、ソフィア大学日本学科創立25周年記念学会に招へいされ、「月の顔」をめぐる文化形象について、「煙たい月と日本文化 その顔の形象をめぐって」と題して発表し、論文化を進めた。また、大阪大学文学研究科において、古典研究の国際的戦略などをめぐって「グローバル研究日本クラスター」の招待講演を行った。

上記の諸問題を受け、新展開の新規挑戦的萌芽研究「国際的日本研究における古典文学研究の基層と戦略」の申請を立案した。

(3) 本研究の計画年度は上記2年間であったが、関連研究の進展が充実しており、また所属機関業務の繁忙のため十分な時間を確保できなかったこともあり、執行を延長して、28年度へと継続した。最終年度は、研究の展開とまとめを行い、次のような研究展開があった。

月の顔の形象をめぐると日本の性格とその近代化・西洋化の関する分析を起点とする問題を展開し、「煙たい月」の形象を捉え、その先に、エコクリティシズム(文学に於ける環境批評)さらには日本古典文学における擬人化現象について研究を進め、27年度にブルガリア・ソフィア大学で発表した内容を活字化した。

「言語のプライバシー」に関わる重要な要素を含む総括的発表を中世文学学会シンポジウムで行った。この問題は、新科研へと接続して展開し、成稿を進めた。

『源氏物語』に潜在するインド性や国際性の問題について、「妊娠小説」という概念を応用するなど新たな視点を開発し、海外での発表・講演等を通じて考察を促進した。

歴史的な「世界文学」観と古典文学の関係については、上記中世文学学会シンポジウムの発表で言及し、議論を進めた。

夢と文化をめぐるとの問題については、国際研究集会の報告として『夢と表象 眠りところの比較文化史』(勉誠出版、2017年)をまとめたが、本科研のテーマに即しては、

前年度に開催した仏教文学会シンポジウムで問題の整理と発表を行い、その成果を学会誌に公表した。

古典研究の国際的戦略については、前年度の大阪大学での招待講演、また海外での客員教授や学会発表を通じて議論を重ね、国際日本文化研究センターにおいて、報道懇談会特別報告を行い、新科研との接続を進めた。

その他、国際高等研究所での共同研究を踏まえ、禅文化の近代的屈折について、『方丈記』受容と夏目漱石の関係を論じた。

(4) 上記の如く、3年間を通じて、多くの研究展開があった。これらの成果をもって「超越論的文化バイアス論」と銘打って進めた本研究のオリジナリティは十全に達成されたと考える。従来の日本文学・文化研究の構造に大きなパラダイムチェンジを引き起こして、新しい研究ビジョンを確立したいという、本研究の裡面に込めたもう一つの狙いも、概ね達成されたと思量する。さらに本研究の展開は、新たに申請し採択された関連の新規挑戦的萌芽研究「国際的日本研究における古典文学研究の基層と戦略」との接続を果たし、新たな学問研究の方法論発掘へと拡がっている。最後にそのことを付言しておくたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

荒木 浩、煙たい月と日本文化 その顔の形象をめぐって、Conference Proceedings Future Perspectives: 25 Years Japanese Studies at Sofia University "St Kliment Ohridski". Sofia University Press、査読有、2016、pp.27-39、

荒木 浩、禅の本としての『方丈記』『流水抄』と漱石・子規復書簡から見えること、天野文雄監修『禅からみた日本中世の社会と文化』ペリかん社、査読有、2016、pp.212-229、

荒木 浩、『今昔物語集』の宋代序説、アジア遊学、197、査読有、2016、pp.16-31

荒木 浩、夢と表象 研究と「夢記」の位置、仏教文学、41、査読有り、2016、pp.49-54、

荒木 浩、『二十六夜』の信仰と捨身(宮澤賢治と共存共栄の概念: 賢治作品の見直し プラット・アブラハム・ジョージ編、ネルー大学語学部日本研究学科) 査読有り、2014、pp.12-23、

〔学会発表〕(計 3件)

荒木浩「夢と表象 研究と「夢記」の位置」、仏教文学会六月例会例会「《シンポジウム》夢記研究の現在」、2015年6月6日、明治大学駿河台キャンパス、

荒木浩「対外観の中の仏教説話と説話集」、

説話文学会平成27年度大会講演会「仏教説話の流れ」、2015年6月27日、二松學舎大学九段キャンパス、

荒木浩「散文の生まれる場所 中世という時代と自照性」、中世文学会春季大会シンポジウム「説話が機能を超えるところ」、2016年5月28日、大妻女子大学、

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://research.nichibun.ac.jp/ja/researcher/staff/s005/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒木 浩 (ARAKI, Hiroshi)

国際日本文化研究センター・研究部・教授
研究者番号：60193075

(2) 研究分担者 0人

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 0人

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

上野 勝之 (UENO, Katsuyuki)